

10周年記念祭寄稿

10年の重み

里山倶楽部 溝口博之

発足は勢いでできるが、継続は努力の積み重ねが必要で、10年という月日は結構重いものがある。私を作った会社は40周年を迎えたが、現役のところは10年単位で長期計画を立てていた。今なら5年でも長すぎる感じがする。時代の流れの速さもそうだが自分自身の年齢も考えなければならぬからである。

学園花の村10周年記念、宮城翁が二宮尊徳の教えに沿って開いたと聞いているが、私は途中からの参加で宮城さんのことはほとんど知らない。いずれにしても、当時意欲に燃えて始めた会員も年を重ね、時代の変化もあって花の村も、光陽の里、倉馬の里も分岐点に立っていると思う。今後の10年をどう運営していくか理論より実行する人がい

なければ前に進まない。

里山倶楽部は、倉馬の里を楽しむことを中心として活動してきた。倉馬の里が誰でも楽しめる憩いの場にしたという目標の達成過程を楽しむ活動である。しかし、志を同じくする仲間が少しずつ増え、新陳代謝しなければ今後の10年はないと思う。私も5年単位で物事を考える年になった。10年計画の立てられる若手とともに楽しみたいと思っている。

倉馬の里に寄せて

全報連会長 尾島 輝雄

今から16年前、故宮城正雄氏の発起で市民組織を立ち上げ、平成16年に「倉馬の里」をオープンされました。今までに幾多の困難があったかと思いますが、その困難を皆様方が団結して、一步一步克服され、今日に到ったのは、敬意と崇敬に値します。報徳思想や哲学をいくら学んでも、実行・実践がなければ何の

意味もありません。「倉馬の里」の皆様方は、その事を私たちに身をもって教えてくださいました。今後の発展を心より祈念しています。

「倉馬の里」の十周年に思う

美しくなった里の風景

八王子市 伊藤公博

「美しい自然の中で大地を耕し食糧を得るといふ営みは我々に根源的な喜びを与えてくれる。今の時代は総ての人からこの農の喜びを奪い、かつ、企業的大農そのものが、かけがえない地球環境を損ないつつあるのではあるまいか。・・・分度をわきまえた小さな農を営めば、必ず里の風景が美しくなる。それは土地をこよなく大切に扱うからである・・・」。

これは「倉馬の里」の母体である「学園はなの村」の設立理念の一節です。この理念に導かれて耕作放棄された棚田や茶畑の上に、故宮城正雄さん、柴桂子さん、藤本将さん

達が十年という歳月をかけて育てあげたのが「倉馬の里」です。小さな農の営みが生み出す美しさは格別なものがありません。

高台のサツマイモ畑に立つと、足元の茶畑の向こうは溜池を擁した田んぼと農家、その向こうは市街地です。畑を下るとイノシシよけに囲まれた遠藤さんの整然と手入れの行き届いた畑が見えてきます。地元の人たちのご協力を得て敷設した里の舗装道路に沿って里山倶楽部員の皆さんが植えた花や果樹園の木々が心を和ませてくれます。自生する栗や柿や花々や、人を怖がらないキジなどが心に安らぎを与えてくれます。これが新幹線掛川駅から車で20分の「倉馬の里」なのです。「倉馬の里」はこの10年で花と緑に囲まれエネルギーに溢れた美しい場所に変わったのです。

次の10年を楽しみます。